

# まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第65号 (令和5年5月15日)

読者数: 671名(募集中)

メール: [hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp](mailto:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp)

HP: <https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人: 前岡智之、編集人: 瀧口信二

配信元: 広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

## ウクライナに平和を！平和を我らに！



○ピースプロムナード (慰霊碑と原爆ドームを結ぶ平和の軸線上)



○ひろしまゲートパークプラザ



○峠三吉没後70年、碑前祭



○旧陸軍被服支廠 open week  
自由見学会

### 目次

- 巻頭言: 21世紀地球共同体にとっての持続する聖地都市に向かって  
.....広島大学名誉教授/建築史・意匠 杉本俊多
- ひろしまのまちづくりの動き
  - ・旧市民球場跡地、ひろしまゲートパークプラザがオープン
  - ・峠三吉没後70年、碑前祭
- 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」その7.....コメント 藤原美香
- ほっとコーナー: わたしの人生.....弾き語りユニット 飴色りぼん。彩瀬
- 広島復興の軌跡・人物編: 広島復興の過程に関与した外国人たち  
.....編集委員 石丸紀興
- 「広島市のために中央図書館がどうあるべきか考えよう」報告: 講師出雲俊江他
- 特別寄稿: 広島文学資料保全の会 池田正彦
- 編集後記: みんな子供だった.....編集委員 前岡智之

## □ 巻頭言

### 21 世紀地球共同体にとっての持続する聖地都市に向かって

広島大学名誉教授／建築史・意匠 杉本俊多



昨年、広島市景観審議会会長を任期満了で退任させていただいたが、最後の大事な仕事は平和記念公園の中心軸線を広域に広げ、「原爆ドームを望む南北軸の眺望景観」として広島市景観形成ガイドラインに定め（2022年）、平和都市の将来の都市景観構造を方向付けすることだった。

広島市公文書館が出版した『広島市被爆70年史 あの日まで そして、あの日から 1945年8月6日』（2018年）では、丹下健三が原爆ドームに焦点を当てた公園軸を設定する経緯を説明し、この軸線が城下町建設以来四百年続く都市構造と一体化していることも書いておいた。このヴィスタ軸線が今後、平和都市広島市民の象徴として息づき、かつ世界から訪れる人々が感銘を受ける視覚体験となってくれることを期待している。

被爆後80年近くになって、丹下らが都市壊滅の現場に立って実体験した悲惨な思い、そして近代民主主義時代の理想都市像を構想した熱意は、今、賑わう都心部に立って想像するのも難しい。彼が20世紀半ばの理想都市として描いた平和大通りや河岸緑地などを含む広島デルタのグランドデザイン、平和記念公園から北に、広島城本丸を含む川沿いに構想した緑地と文化施設群の大計画は、おおよそ実現したものもあるが、大きく様変わりした。

理想主義的なトップダウン型まちづくりは、戦後市民の生存と現実生活の欲求から醸成される、場当たりのとも言える試行錯誤のボトムアップ型まちづくりとせめぎ合って、今日のやや複雑な都市イメージを催させるに至っている。

ヨーロッパの都市・建築史を研究してきた私には、ある普遍的な都市進化過程というものがあることを知ったが、日本の都市進化もほぼ同様の過程を辿ったことを理解するに至った。たとえばヨーロッパのルネサンス理想都市は、中世を脱して個人の才能を発揮する芸術家たちによる幾何学デザインによったが、それは毛利輝元が秀吉の影響下に、知的な武将黒田如水（官兵衛）を招いて広島城下町をデザインさせたいことと比較でき、そのよく整った都市形態はより純粋に日本の近世都市のモデルと言ってよい。

古代、中世、近世、近代と続く都市の歴史は、都市が各時代の遺伝子を生み出し、積み重ねてきた一種の進化過程だった。それは今日の脳科学的な発想で言えば、人類が脳内各部位をつなぐ神経ネットワークのアルゴリズム（注釈：コンピューター・プログラムのもととなる熟考された課題処理手順のこと）を進化させてきた過程でもある。そして平和都市広島はどのような脳内アルゴリズムを形づくっているのかと考えると、そこに私は21世紀の地球共同体時代の都市進化への兆しを見る思いがする。

毛利期の新都市構想を描き記した「芸州広島城町割之図」（山口県文書館蔵）を分析してみると、そこには京都の古代条坊制に倣った基盤目街区構造を導入し、中世の宗教施設群を要所に配し、それらをあたかも近世のデザイナーが幾何学デザインしたような城下町の輪郭が見出され、各時代の都市遺伝子を重層化させて進化する都市像が把握できる。

明治に近代へと移行する都市広島は、各種公共施設を備えつつ、近代国家の軍都となるが、被爆後には改めて近代民主主義時代の都市へと改編される。その際に復興都市構想を立体的にデザインした丹下はモダニズム的な理想都市を描きつつ、原爆ドームに焦点を当てた平和記念公園の造形を通して、それを「平和を創り出すための工場」と位置付け、聖地都市への出発を画する。

聖地という言葉には今日の近代合理主義社会にはそぐわないような宗教的な響きがあるが、手垢のついた宗教も原点は素朴なものだった。釈迦にせよイエスにせよ、争いをなくし、社会に平和をもたらそうとする素朴な人間感情や倫理観に始まり、心の持ち様を説いた。

聖地とはその純粋さを追体験する場所として成立していた。教説というものは各時代の世界観、いわば脳内アルゴリズムであり、時代の変化とともに改編され、より進化したものにレベルアップされなければならない。核戦争の時代にある現代社会の争いを収め、世界の人々の共感と協調

を促そうとする「ヒロシマの心」は、今の時代に地球共同体 70 億余の人々が共有するべき脳内アルゴリズムを唱道していると考えらるべきであろう。

広島を訪れる世界の観光客はまずは平和記念公園を訪れ、世界的なアイコンとなった原爆ドームを目前にし、身体感覚で記憶して帰る。ほかならぬ広島を訪れる彼らは単なる享乐的な観光客ではなく、聖地巡礼者と見なせる。

そうすれば巡礼宿と、彼らを支援するホスピタリティが整えられているべきだが、資本主義経済の今日にあってそれは観光ビジネスを促しつつも、根本において一般市民の親切心とボランティア的な日常活動を前提とする。

個々の巡礼者は時間を掛け、心と身体を駆使しながら目的地へと向かうわけだが、そこで他の巡礼者たちと合流して心を通じ合い、連帯感を抱くところにも大きな意義がある。平和記念公園は彼らの出会いの広場となり、「平和を創り出すための工場」となる。

私はかつて学生時代の 1970 年代の夏、アムステルダムでダム広場に世界各地から旅してきた多数の若者たちが集まり、交流し合う光景を前にして言い知れぬ一体感を覚えたことを記憶している。ここで言う巡礼とはそのような共感を求める旅のこともである。都心にポッカリと空いた都市広場が必要なのは、それがいわばボトムアップ型の平和のための装置となるからである。

今日、広島市民が考える以上に、世界中の多くの人々がヒロシマという都市名とそれが持つ意味を知っており、そこに希望を託している。小家族集団に始まる人類の社会進化は、都市へ、国家へと次第に大集団へと向かい、今、気候変動という危機、またインターネットによる一体化などにより、地球はひとつの大きな共同体になろうとしている。

その地球共同体の、内紛とも言うべき争いをいさめ、平和をもたらす要となる都市広島は、さしずめ歴史上の最も進化した聖地都市ということになる。そのイメージは広島市民だけでなく、70 億余の世界市民が思い描き、築くものとなる。

戦後 80 年近くにわたって被爆者と市民が築いてきたものを継承しつつ、ここでもう一度、被爆直後の理想主義時代に取り組みされた理想都市像を思い起こし、そして今日の日常感覚をもとにブラッシュアップし、将来に備えたい。

平和公園とその南北軸、そして平和大通りの東西軸は、原爆ドームと並ぶもうひとつの都市的なアイコンとして世界の人々が記憶し、希望を託するものとなるはずである。歴史的な聖地都市は何千年も持続してきていることを思えば、百年足らずのヒロシマのまちづくりはまだ緒に付いたばかりである。都市広場のこれまでの持続性をこれからの持続性につなげつつ、日々の生活に追われるだけでない、骨格のあるまちづくりを心がけたいものである。

## ひろしまのまちづくりの動き

### ① 旧市民球場跡地、ひろしまゲートパークプラザがオープン！

旧市民球場跡地にイベント広場「ひろしまゲートパークプラザ」が 3 月 31 日にオープンし、式典及び 3 日間の記念イベントを開催。

跡地は旧市民球場の形状を継承した中央イベント広場を囲む形で 8 棟の商業施設「シメントひろしま」と「大屋根ひろば」を配置。慰霊碑と原爆ドームを結ぶ平和の軸線を延長したピースプロムナード（散歩道）を通し、勝鯉の森エリアは旧市民球場の右翼席のベンチを再利用した憩いの場。広場の東側は若者向けのスケートボードパークを整備。



中央イベント広場

ゲートパークは NTT 都市開発 (株) を代表とする企業体が運営し、グルメやマルシェなど 1000 人以上を集めるイベントを年に 90 日以上開き、年間 100 万人以上の集客を目標とする。立地も良く市民の愛着のある地だから簡単にクリアすることができるだろう。



中国新聞 2023. 3. 29

中央イベント広場は旧球場のグラウンドの形を残し、ホームベースと投球プレートがモニュメントとして同じ場所に埋められている。C型に並ぶ商業施設各棟の軒先のカーブが球場のスタンドを連想させる。カーブの優勝記念碑などが点在する勝鯉の森と対面する形に再利用した右翼席ベンチが置かれるなど、旧市民球場のメモリーがあちこちに残され、広島東洋カープの本拠地であった記憶がよみがえってくる。

イベント広場の西側にある高さ約9m、広さ約900㎡の大屋根ひろばは全天候型の屋外イベントスペースで、雨の日でもテイクアウトした軽食を楽しめるなど憩いの場となる。



ピースプロムナード

ピースプロムナードは桜並木で、舗装の一部には路面電車の被爆敷石が敷かれ、振り返れば原爆ドームが望める。

イベント広場の一角にはアーバンスポーツが楽しめるジャンプ台やボックスを備えたスケートボード場がある。

また北側約500mには新サッカー場が建設中で、来年2月に開場を予定し、相乗効果による人の流れが倍増することが期待されている。

原爆ドームを挟んで、南に被爆者を追悼する平和記念公園があり、北にゲートパークの市民ひろばがあるこのゾーンは平和記念都市ひろしまのコア（核）である。

いろいろなイベントが催され、多くの人たちで賑わうことは喜ばしいことだが、ただそれだけではここである必然性はないし、時間と共に熱は冷めて寂れていくであろう。

戦災復興に明け暮れるなか、1957年に地元財界の寄付とたる募金により建設された旧球場が市民の希望の灯であった歴史が希薄な点と、1949年にこの地で第3回平和祭が開かれ、今も残る第2代目平和の鐘の扱いがぞんざいであるところが少し残念に思う。

歴史は貴重な財産であり、ひろしまのまちづくりはもっと広島を大事に育てて活かさなければ勿体ないのではないか。

## ② 峠三吉没後70年、碑前祭！

「ちちをかえせ ははをかえせ・・・」で有名な原爆詩人・峠三吉は1953年3月に手術中に36歳で死去。

没後10年、彼の先覚的な功績の顕彰と文学遺産の継承発展のため詩碑を平和記念公園内に建設し、1963年8月6日に除幕式。

以降5年毎に開いていたが、没後50年を最後に20年振りの碑前祭（主催：広島文学資料保全の会ほか）である。

平和記念資料館東館の北側約50mに位置し、原爆詩集「序」の「にんげんをかえせ」が刻まれた石碑の前に県内外から約100名が参列。文学資料保全の会の土屋時子代表の開会あいさつ後、全員で黙とうを捧げる。

その後、同会顧問の水島裕雅さん（千葉県在住、広大名誉教授）があいさつに立ち、「ロシアのウクライナ侵攻により核戦争の危機にさらされている今、峠さんが生きていればどう思っているだろうか？」と問いかける。

石碑を設計した故四国五郎の長男光さん（大阪在住）は父親と峠との強い絆を語り、『「にんげんをかえせ」は他者に訴えると同時に「人間性を取り戻せ」という自身への問いかけでもある』という父親の解釈を紹介。

原爆文学を研究する女学院の学生や峠たちの活動を描いた演劇「河」の出演者たちが原爆詩集の作品を朗読し、命を賭して反戦反核と平和を訴えた峠の遺志が聞く人の心に響く。

現在、広島文学資料保全の会は峠三吉の文学資料を含む原爆文学のユネスコ「世界の記憶」の申請を準備している。原爆ドームの世界遺産と共に被爆の実相を表現した原爆文学を「世界の記憶」として残すことは意義深く、多くの人々の共感の輪が広がることを期待したい。

そして翻訳された原爆文学が海外の多くの人にも読まれるようになることを願いたい。



商業施設の軒先



大屋根ひろば



主催者の開会あいさつ



## ○ 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」 報告その7 (最終回)

広島県は3月に被服支廠の活用策を考える有識者懇談会と有識者による安全対策・価値調査等検討会議を開き、活用の方向性をまとめ、国の重要文化財の価値があると結論付けた。また市民団体「旧被服支廠の保全を願う会」は保存のための工事費に用途を限定した基金創設を県に要望。

有識者懇談会は、基本的な考え方として「みんなで守り・育て続ける～時と人をつなぐ場 被服支廠～」というコンセプトを掲げ、活用の方向性として(1)広島県民・来訪者の交流促進を目指した文化や芸術、生涯学習などの拠点、(2)広島府の自然や歴史・文化・平和などを学べる拠点、(3)国内外の人々が訪れ、県民とつながり、広島を体感するための拠点、の3項目に要約。その上で県民参加のワークショップで出たアトリエや展示施設、歴史博物館、ホテルやコンベンション施設等、30案の活用アイデアを例示。

今後、県は国や広島市とつくる研究会で具体的活用策を検討し、活用策を決定した上で耐震化の予算を計上する予定。

有識者検討会議は、次の4つの特質から被服支廠の歴史的・文化財的価値を認めた。

- (1) 旧日本陸軍の歴史を知る上で重要な遺構
- (2) 500mに及ぶ景観を形成する倉庫建築
- (3) 煉瓦造及び鉄筋コンクリート造を併用した設計技術の高さ
- (4) 被爆の痕跡と多くの被爆者を受け入れた被爆遺構

県は今後、報告書を文化庁に提出し、重要文化財指定を働きかけていく。

県も財政不足のため、重文指定による国からの支援を求めたり、市民の協力による基金の創設など、幅広い動きをしていかなければならない。

また、国所有を含めると4棟あるので、多様な使われ方の可能性を秘めているが、整備費や維持管理・運営など大きな課題も抱えている。上手に収れんさせていくためには長期的視点に立ってプロセスを大事にする必要があるし、この動きを盛り上げていくためには継続的な市民参加型の運動が求められる。その先鋒として地元町内会有志による下記のようなイベント開催は望ましいことである。

### \* 「広島旧陸軍被服支廠出汐倉庫 open week 自由見学会」 開催 \*

複数の地元町内会有志による「わが町活性化委員会」主催の「旧陸軍被服支廠出汐倉庫 open week 自由見学会」が3月26日(日)から4月2日(日)まで開催された。

春休みの1週間、気楽に立ち寄れるイベントとして企画され、建物の中には入れないが、10時～13時の間は敷地内を自由に入出りできる。

初日は地元の小学生や高校生、市民が約140人参加。見学会の冒頭、小学生が被服支廠について学んだことを発表し、参加者はゴミ拾いをしながら見学。二日目は、広大学生寮「薫風寮(くんぷうりょう)」として使われていた当時の話を聞くことができた。後半には、市立大学の学生「ヒロシマ ヤング ピース ビルダーズ」が子ども達と制作した紙芝居『8月のウサギ～被服支廠物語～』が公演されたり、建物ガイドが催された。



#### 主催者側の事務局長藤原美香さんのコメント

恐らく初となる地元町内会有志が主催の今回のイベントでは、入場者数が延べ596名であった。来場者にはメッセージの記入もお願いした。187枚のメッセージより、地元の方からも保存活用の声を沢山いただいた。近くに住んでいても、初めて訪れた方が多いことも知った。初めての来場者はスケールの大きさに驚き、ガイドの説明もあって軍都広島を想像できたようであった。今後も見学会の開催を求める声も多く、来場者はより多くの人に実際に訪れて欲しいと感じたようであった。

今回の目的の一つ「地域の町内会や住民、企業や学校を巻き込んだコミュニケーションの場にしたい」は、近隣の企業からテーブルの貸与や学生ボランティア参加、児童の発表など、ある程度の成果があったと思う。今後もこのような見学会を継続しつつ、被服支廠への関心と地域の活性化の向上に繋げていきたい。

## □ ほっとコーナー

### わたしの人生

弾き語りユニット 飴色りぼん。

KEY/CHO 彩瀬

はじめまして、「飴色りぼん。」の彩瀬です。今日はわたしの幼い頃から今に至るまでのお話をしたいと思います。

#### —幼い頃—

わたしは3歳からエレクトーンを習っており、教科書は無視して、ただただ自分の好きな音楽を弾いてきました。数年経って小学生になりました。私の周りは運動神経の良い友達が多く運動が苦手だったわたしに、「(名前)ちゃんって何もできないよね」と何気なく言いました。

そんな一言に私は自信をなくしてしまったのです。

#### —音楽—

自信はなかったものの、音楽が好きだという理由だけでエレクトーンを続けていました。高校生になり軽音部に誘われて初めてバンドに出会いました。誰かと音楽を一緒にすることに感動しました。

ある日、地元バンドのライブを見に行きました。そのライブで初めて出会ったドラムの方は看護師をしながら、夫でありながら、父親でありながらいくつものバンドを組んでいました。

その方に言われた一言に衝撃を受けました。「何も我慢しなくていい。やりたいことは全部やればいい。」そうだ。やりたいことをやればいいんだ。

#### —大学—

わたしは幼稚園の先生を目指し大学に入りました。バンドをするために軽音サークルにも入り、そこで出会ったのが「飴色りぼん。」のGt.Vo.藤月まりいちゃんです。初めて彼女の歌声を聞き一目惚れしました、この人と音楽をしたい。そうして「飴色りぼん。」を結成しました。

#### —飴色りぼん。—

「貴方が主人公の物語」をテーマに音楽を作っています。私達の音楽を聴いて、悲しかったことも嬉しかったことも忘れず思い出してもらえるような、切なくも温かいそんな曲をこれからも作っていきたいです。



飴色りぼん。(左が私)

#### —これから—

わたしはこれまでに会った人みんなに感謝しています。小学生の時、自信をなくすような友達の一言がなければ音楽は続けていないだろうし、高校生であるドラムの方に出会ってなければ社会人になってからも音楽は続けてないと思います。

そして共に音楽を作ってくれているまりいちゃんにも感謝でいっぱいです。

自分たちの音楽を一人でも多くの方に届けられるように、わたしは音楽を続けます。

何も我慢しなくていい。やりたいことは全部やればいい。

これからもそうやって生きていきたい。

## ○ 広島復興の軌跡・人物編 (第35回) 広島復興の過程に関与した外国人たち ～様々な形での広島への関り、少しでも覚えておいてあげたい～

本来であれば、「復興の軌跡・人物編、丹下健三その6」として連載するはずであったが、ここで方針を変更して広島復興に関与した外国人について改めてまとめて報告しよう。すでにジョン・モンゴメリー復興顧問(まちづくりひろしま第26号)、ジャスティン・ウィリアムスGHQ国会課長(第41号、42号)、保健衛生担当者サムス准将(第48号)、タム・デーリング公園計画専門家(第52号)、米国人報道関係者マイルス・ヴォーン(第55号)と、5名の外国人の関与について述べてきた。それらの関わり方は様々で、広島復興に貢献したとばかり言い切れない面もあり、過度に称賛することは問題であるし、逆に排外的論調で彼らを批判することも正当ではなかろう。果たして彼らはなぜ戦後の日本・広島に関わろうとしたのであろうか。そのためまず関与外国人についての視点を類型化し、それぞれの事例での関与の検討を進めてみよう。(敬称略)

## 1. 業務として、制度の枠組みとしての関与

日本が連合国と戦って敗戦国となり、昭和20年8月以後占領状態となった（以後年代表記は昭和とする）。そこではマッカーサー元帥という存在があり、その配下にあったGHQ関係者をまずあげることができる。マッカーサーは被爆2周年にメッセージを寄せ「広島への教訓」に言及し、広島関与の大人物であった。

広島・呉はGHQ占領政策において重要な位置を占めていたであろう、多くの外国人が関係者として名前を残している。実はすでに終戦後の10月、11月段階で、合衆国戦略爆撃調査団という組織が広島の建物すなわち被爆建物の実態調査で来広している。団員の名簿は見当たらないが、ファーレル代将を団長とした大規模な調査であった。何しろ被爆建物を特定し、凶面を起し、構造的破壊度等被爆の実態を原子爆弾の効果（effect）・威力から明らかにしようとしたのであり、客観的な被害・影響研究として注目すべきものであった。よってまず調査団の関与に注目したい。

被爆1周年平和復興市民大会に登場したのが広島復興顧問であるハービー・サテンであった。同様の関与はジョン・D・モンゴメリーで、学者肌であったことにより、極めて積極的な提案に結び付けている。後に自らの提案による効果を検証しようとして数度の来日を果している。

同じころ復興顧問という形で、豪州軍のS.A. ジャビー、英国軍人のサテンが務めていた。昭和23年の第2回平和祭に参列したのは英連邦軍（豪軍司令官）ロバートソン中将であり、「天罰として広島のような災害」と語ったことで物議を醸したとされる。ロバートソンは24年の第3回平和祭にも出席して、広島の平和を推進しようとする営為を記したメッセージを寄せ、それをギャレット英連邦軍関係者が代読している。この時のマッカーサー元帥からのメッセージはローレンス・E・バンカー大佐が代読している。同様に豪州軍ウォルトン・H・ウォーカー中將もメッセージを寄せ、広島市井出渉外課長が代読している。T. M. クロワード軍政部長は早い時期に交代していたにもかかわらず、在任中広島の復興へ理解を示していたのでメッセージを寄せて関与を示した。

このような地位あるGHQとその関連機関の関係者の名前が記録されている。

## 2. 進んでの広島の復興過程への関与

ついで登場するのは、シュモーフハウスで有名なフロイド・シュモーフ博士であろう。シュモーフは23年8月ララ物資を搬入するため広島を訪れていたが、一行として翌年8月「ヒロシマの家」建設のために再訪し、10月には皆実町に平和住宅を建設し、翌年には江波に「ヒロシマの家」の建設を果している。一行は直接的に広島の惨状・住宅不足に反応して少しでも貢献しようとしたのである。皆実町平和住宅は姿を消しているが、江波において現在でも記念的な形で保存継承されている。

ジャビーについては復興顧問としての関りであるが、その枠組みを超えた関りを示している。復興関係者の間では有名であるが、早くから被爆建物の保存を訴え、広島市復興審議会にも出席して発言し、丹下健三とも議論を交わし、とりわけ平和記念公園設計を想定してのデザイン論を交わしている。平和記念施設のデザインとして日本的な様式の五重塔を推薦したとされる。また土地区画整理の設計として白島地区に取り組み、キャンベラをモデルとした区画整理案を示した。ややおせっかい、あるいは押し付け的な傾向があり、悪意はなかったが本来の業務担当者を困惑させたことも伝説となっている。

すでに「まちづくりひろしま」で報告したマイルス・ボーンやタム・デーリンクによる構想提案、モンゴメリーの提案なども、進んで復興のモデルを示し、様々な提案をしたのであった。当時の広島にとって参考となり、刺激ともなったであろう。

## 3. 特別の役割での関与

イギリスのデイリー・エクスプレス紙外人記者ウルフレッド・バーチェットは20年9月3日広島入りして廃墟の広島取材し、ヒロシマレポートを報じている。

都市整備でなく建築的な面では、フーゴー・ラサール神父は広島で被爆し、幟町でのカトリック教会再建を志し、ローマ法王に広島救済を懇請し、聖堂再建への多大な貢献をなすとげた。これに協力したグローパー神父他の関係者もいたであろう。22年5月アメリカのフラナガン神父が広島を訪問し、言葉を残している。ヘレン・ケラー女史が昭和23年10月広島を訪問し、広島市民へメッセージを残している。24年6月ザビエル巡礼団72名は広島入りし、私たちはヒロシマのために祈るといい、24年8月ノーマン・カズンズは広島を訪問し（26年1月にも再訪）、原爆孤児精神養子運動を提唱したのである。

26年8月異様なできごとがあった。朝鮮戦争に従軍する米軍飛行士24名（名前までは不詳）が朝鮮戦線に出撃するため、原爆孤児とともに広島の式典に参加するというのであった。彼らの関与は連合軍・米軍の意図によるものであったろう。

イサム・ノグチの関与は独特な面であろう。また採用はされなかったものの慰霊碑（最終的に正式名称は平和都市記念碑と称する）問題で物議を醸したのであった。その模型は現存している。一方平和大橋・西大橋の高欄のデザインに関与したことはよく知られており、26年11月丹下健三と共に工事現場の視察で訪れて、広島戦後史に刻んでいる。



西平和大橋の工事現場のチェックをしているイサム・ノグチと丹下健三

広島に関連した外国人記者の著書は数えきれないほど存在するであろう。十分に把握していないが、例えばロベルト・ユンク著「廃墟の光/甦るヒロシマ」（文芸春秋社、1961 訳本）、R・J・リフトン、G・ミッチェル著「アメリカの中のヒロシマ」（岩波書店、1995 訳本）、広島への直接的な記述は少ないが戦後の日本の思想的な基盤、被爆の受け止め等の深層的な日本人論のジョン・ダワー「敗北を抱きしめて上/下」（岩波書店、2004 訳本）等があるが、以下省略する。

こういった多くの外国人の名前をすべて記憶しておく必要はないかも知れない。広島のような局面で外国人が関わってくれたという記憶で充分であろう。

#### 4. さらにボランティア的な関与

平和運動に関わって広島と関与した関係者は多い。バーバラ・レイノルズやハワード・ベル、フリップ・ノエル・ペーカー、ニコラ・ガイガー、ドミング・ビール、ニール・フレンズデル、ニコラ・ガイガー、ハワード・ベル等、いちいちコメントを加えないが、多くの関与者が存在している。それだけ広島の存在感が大きく影響していたといえる。

#### 5. 終わりに

関与の研究<sup>1)</sup>として、広島側の復興後のアフターフォローが十分でなかったことがあげられる。モンゴメリーは度々自らの関りがどのような役割なり、影響なりを及ぼしたのか気にして、度々日本を訪れるのであるが、十分な検証をのこしていない。さらにいずれ現実化するであろうウクライナの復興において日本はどのような関与をすればよいのであろうかという問いである。おせっかいは必要ないが、広島側に関与への準備や総括の情報が取得されていないし、またその専門的な関係者が特定されておらず、広島の役割に気付いていないといえる。

脚注：1) 石丸紀興、斎藤倫子著「広島市戦災復興計画における関与人とその評価に関する研究—平和公園計画について」（日本建築学会中国支部研究報告集第19巻平成7年3月）pp. 513～516

（編集委員 石丸紀興）

### ○「広島市のために中央図書館がどうあるべきか考えよう」学習会の報告

2月15日、市内の文化団体と労働組合のメンバーでつくる市民の会は徹底審議を求める請願書を市議会に提出。日を改めて、中央図書館のあるべき姿を検討するための学習と集いの会（第4回）を開催したので、その概要を紹介する。

- ・日時：2023年2月23日（木）14:00～16:00
- ・場所：広島市中区地域福祉センター
- ・主催：緑豊かな静寂の地で広島の文化を創造・継承したい市民の会



#### 講師1：出雲俊江（広島女学院大学教授）

##### —中央図書館移転問題の現状—

多くの市民が納得できない点は、計画の手続きが不透明で決定理由が不自然であること、計画の内容が中央図書館としての機能不全を予測させると共に提案の魅力のなさである。

問題解決の妨げとなっている点は、市の不審な計画と態度であり、市民の盛り上がりのなさや図書館についての知識不足である。

##### —求められる図書館の変遷—

1970年代までは市民に本が行き届いていない時代だったので、貸出中心の市民に開かれた図書館が求められる。2000年代以降は市民の生活を支援する課題解決が求められ、文学教養型図書館からビジネス支援・医療情報へ移行する。

また最近では、喫茶コーナーやイベントスペースなど、ゆっくりくつろげる滞在型の図書館が人気を博している。



### —中央図書館の機能と役割—

区の図書館や公民館の図書室等、分館を含めた全体の中核機能を担う。図書や記録その他必要な資料を収集、整理、保存、提供、相談（レファレンス）、学びの提供や情報の提供などの企画・運営の主体。

### —これからの公共図書館—

- ・ **インターネットの普及による変化**—本等のデジタル化により家からアクセスできたり、データベース化してインターネット上に載せれば各図書館での保存が不要になったり、世界中の図書館がネットワーク化すれば各図書館の個性化が求められ、郷土資料が大事になる。
- ・ **学びを支える場としての図書館**—高度情報化が進み、学ばなければ社会生活が営めない現代。その学びとは人の声を聞くこと。その場としての図書館の存在。人が作ったものや書いたものも人の声であり、表現者と出会うのも図書館の意義である。
- ・ **生産する図書館と消費する図書館**—長崎県立・大村市立一体型図書館（ミライ on 図書館）は緑に囲まれた素晴らしい図書館。初代館長の言葉に「図書館は今、本を介した生涯学習の場として住民と行政と一緒に図書館を作っていく方向と本がある快適な空間を作って人を呼ぶ方向に分かれ始めている。両者の間には住民がプレイヤーとして参加するか消費者になるかの違いがある。」とある。人が主役の図書館にするために、利用者も一緒に図書館を作る形が近年の流れ。

### —図書館とは何か、まとめ—

- ・ 「知る権利」を支える象徴としての存在である。
- ・ 郷土資料を中心とした資料構築が重要である。
- ・ 新しい学び、協働の学びの支援の場である。
- ・ 図書館とは、膨大なコレクション（蔵書）と管理運営する人々と予算、安心して展示利用できるシステム、器としての建築である。

### —図書館の事例紹介—

- ・ **武雄市立図書館**—巨大なワンルームの空間。貸出数や来館者を増やす効果。蔦屋が運営。
- ・ **札幌市図書・情報館**—交通の便の良いところにあり、貸出をしないサテライト図書館で利用者が非常に多い。サテライトならエールエールA館に来てよい。
- ・ **指宿市立図書館**—NPO法人「そらまめの会」が運営し、2021年の世界の図書館大賞受賞。
- ・ **スタブロスニアルコス財団図書館（ニューヨーク公共図書館）**—財団の寄付によりデパートを全面改装した図書館。図書館を作る過程で不透明なところがなく、設計も市民とのやり取りを充分に行った上で実施。

## 講師2：石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所主宰）

### —広島市のスタンス—

平成の時代に被爆建物の保存運動と研究に携わり、行政と関わりを持って感じたのは、行政は市民の声を聞く耳をあまり持たない体質。市長に反対意見を述べると職員から猛反発を受け、毛嫌いされたことが何度かあった。

また、市の建築職や都市計画畑の職員は建築やまちづくりに対する情熱を持った人が少ない気がする。今回の中央図書館移転についても何か努力している風には見えない。市民のための図書館を作るためにはもっと時間をかけて議論すべきであり、どんな図書館にしたいのかコンセプトを明確に打ち出すべきなのに素通りしてエールエールA館移転を決めた。

### —中央図書館移転問題の核心—

中央公園内の移転の検討も市の都合で撤回したが、ここに問題の本質がある。中央公園は都市公園として適正な緑地空間を確保するため、建物をむやみに増やせないよう都市公園法で建ぺい率を規制している。

ところが新サッカー場を建設すると建ぺい率がオーバーしてしまう。そこで急ぎよ、法律違反を解消するため市の条例を改正して建ぺい率を増やしたり、古い建物を壊そうとしている。そんな状況のなかで、中央図書館が中央公園から出ていくことは市にとって好都合であった。

本来なら、周辺条件を整えてから新サッカー場建設の検討を進めるのが筋だが、建設に着



石川県立図書館

手してから次々に派生する問題を場当たりの対応している。色々なところに齟齬が生まれ、中央図書館もそのあおりを食ったというのが実情だ。

今の市の都市行政は賑わいづくりと再開発一辺倒になり、被爆都市のまちづくりが隅に追いやられている。中央図書館の計画は、賑わいづくりが悪いとは言わないが、広島市としてより本質的なコンセプトが求められるべきである。

#### —問題解決のために—

新図書館はどの位の蔵書数を想定しているのか？一杯になったらどうするのか？建て替える時にはどうするのか？他、市当局に公開質問状を出して確認すべきである。どちらにしても、エールエールA館への移転は将来性の欠如した計画と思う。

かき船移転問題の時、反対住民と行政が公開討論会を行い、その司会をやったことがある。市の担当者は想定問答を用意し、それ以外のことは発言せず、できるだけ議論を避けて逃げの姿勢であった。

#### (質疑応答)

・大学生はこの問題に対してどんな反応か？→(出雲)問題の本質を理解していない場合、身近な場所にあるエールエールA館がいいという学生もいる。

・今回の既存百貨店の高層部を改修する図書館移転は建築法上可能か？→(石丸)古い建物を改修して新しい建物に再生させる事例は多くある。図書館の場合は特殊な機能が求められるので、制約を受けることが多く、新築のような大胆な設計は難しい。

#### \*コメント\*

この度、松井市長が再選されたが、中央図書館移転のお墨付きとは話が違う。再選後の会見で、平和記念都市建設法を尊重して国際平和文化都市を目指したいと語っていたのは良としたい。ただ、その精神があれば、市民の意向を無視する形で広島の文化度を象徴する中央図書館を既存の商業施設の上階に移転させるような愚かなジャッジはしない。

万が一、商業施設を運営する市の第3セクター「広島駅南口開発株式会社」を救済するための手段としたのなら、市民への背任行為である。

もしこのまま移転すれば、広島市の汚点として後世まで語り継がれることになるだろう。そうならないようオンブズマン制度等を活用し、これからも市民が力を合わせて行政と戦わなければならない。  
(編集委員 瀧口信二)

## □ 特別寄稿

### 「禎子の折り鶴」ユネスコ申請 (2月17日読売新聞伝える)

#### あまりに政治的な「和解」を危惧する

広島文学資料保全の会 池田正彦

読売新聞(2月17日)は一面で「禎子の鶴を 世界の記憶に」・「被爆80年の登録を目指す」の記事を報じた。

その中で、登録を目指すのは「SADAKO LEGACY」と、原爆投下を命じたトルーマン米大統領(当時)の記録を保持・公開する米国の「トルーマン図書館」(禎子の折り鶴を寄贈されていると言われている)などが、折り鶴のほか、禎子さん自らの血液検査の結果を記したメモやカルテなどの資料を申請するとのことを伝えている。

審査は2年に1回で、1か国からの申請は2件以内とされる。ただ、2カ国以上の申請の場合はこの限りではない。(「朝鮮通信使」がこれにあたる)

禎子さんの親族は、トルーマン大統領の孫クリントン・トルーマン・ダニエル氏らの親交を深め、トルーマン氏の協力を得て、日・米で共同申請することになったようだ。

さらに、親族は、「禎子の平和への思いを後世に伝え、唯一の戦争被爆国としての実相を伝え、次世代の子どもたちが〈人の思いやる心〉を育むことに役立ててほしい」と語っている。

とまれ、広島市は現在G7サミット開催騒動で浮かれている。16年5月、当時米大統領・オバマと被爆者が抱き合ったあまりに出来過ぎた演出に違和感を覚えた方も多いただろう。今回の「禎子の折り鶴」申請が、「日・米和解」の政治的な舞台にならぬよう心から祈るばかりだ。

(親族は、広島県や広島市に協力依頼をする、とのこと)

広島市は、中央図書館のエール・エールA館移転（広島駅前商業地域）問題、さらに「はだしのゲン」の平和教材からの削除問題で大きな批判に晒され頭が痛く、広島県は、教育長の官製談合、11万冊の蔵書廃棄などで揺れている。

軍事では、いち早く「和解」し、憲法9条を持ちながら、「戦争ができる国づくり」に励んできた日本。G7サミットの手土産なのだろうか、中国新聞（23年2月22日）は、広島湾での自衛隊と米海軍の日米初訓練を伝える。

そういえば、強引にすすめたオリンピック広島招致運動やオバマのプラハ演説を過大評価し、オバマジョリティ音頭を踊った秋葉前広島市長が、イスラム教団体の平和賞（アハマディア・ムスリム平和賞）を受賞したと伝えられ、記者会見で「被爆者・市民の立場で発言してきた」と語ったという。

市長時代、「平和」を具現とした公約「折り鶴記念館」建設は霧散したのだろうか。著書に「報復ではなく和解を」（岩波書店）があることを思い出した。

現在、私たちは「原爆文学資料のユネスコ記憶遺産」申請を行うつもりで準備している。（今回は、栗原貞子・原民喜・峠三吉文学資料に新たに大田洋子「屍の街」初稿・原稿を加える作業を粛々とすすめている）[市民からの「賛同署名」](#)（\*リンク参照）を開始した。

栗原貞子資料：創作ノート「あけくれの歌」―「生ましめんかな」などの創作ノート。

峠三吉資料：「原爆詩集」最終原稿、8月6日を記録した日記など。

原民喜資料：原爆被災時の手帖。（「夏の花」の基となった）

何れも8月6日直後の惨状を記録し、優れた文学作品として読み継がれ、「世界の記憶」に登録することは世界史・人類史的に重要なことである。

## □ 編集後記

### みんな子供だった

こどもの日にこれを書いています。私たちはみんな子供だった。

戦争は一向に終結のきざしすら見えない中、コロナ感染者数の発表がニュースの冒頭から外れ、マスクの着用が自己裁量となり、ゴールデンウィークを満喫する報道が流れている。

#### 「楽しい時こそ学びの時」「苦しい時こそ学びの時」

今こそ時間をとって冷静になり、これまでを振り返り、これからを考えてみる格好の時です。G7広島が開かれる時期にわが町ひろしまの進むべき姿や現在の問題点を考えてみませんか。

広島の問題は山積みですよ。経済効果を最優先していますがこれでいいのですか。

何か始めませんか。「世界の広島の心」について考えてみませんか。

まだ被爆100年の22年前ですよ。この先100年、1000年とこの街は続きますよ。

子供たちにこの街をこのままで受け継がせていいのですか。

目先の変化に満足し、その内容に無関心で良いのですか。

まちづくりは無数の単位（その原単位はファミリー）の集合が活動の中心となるはずですよ。

おうちで少しの時間をとって広島を目指す姿について子供たちと話してみませんか。

悔いのないひろしまを実現するために。これは、親の役割ですね。

（編集委員 前岡智之）

**\*メルマガを読まれたの感想や質問及びひろしまのまちづくりについて  
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

（投稿は500字程度でお願いします）

### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表